

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	イメージと言葉と動作 : 机といすの地図あそび
Author(s)	市山, 仁美
Citation	児童の言語生態研究 , 11 : 58 - 63
Issue Date	1982-12-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045126
Right	
Relation	



イメージと言葉と動作

机といすの地図あそび

横浜市立大正小学校二年三組(四十名)

昭和五十六年二月二十五日実施

市山仁美

教材 座席カード4枚

授業テーマ及び単元設定の理由

或る事象の説明をしたり、言われたことを理解するということは、話し手のイメージが的確に言語に写し出され、さらに聞き手のイメージを想起させるという過程をとらなくてはならない。

低学年の子供達には、イメージの世界であっても、そのイメージが言葉と深くかわりがあるとの自覚はないし、大人のように多くの手段を持たず結果を推測して話す方法も持たない。もちろん省略、拡大の意識も持たない。ときに省略とみえることがあってもそれは、大人から見るとそのように見えるだけで特に意識的に行うわけではない。無意識に自分の肉体の感覚から出発した印象や身近なことを中心に言語化していくものと考える。無意識であるから、その印象的なものを選ぶときも無意識である。選んだものが理解されるための大きな鍵になっているということも意識していない。

子供の話というのは、極端に言うと大人にとって何を言っているのかわからない。という状態が出てくる。同時にわけのわからないことを言い合っても子供同志は、互いに理解している、という状況も起ってくる。大人と子供のイメージの言語化の過程には違いがあると考えなければならぬ。

子供一人々々についても違いがあるが、共通項としては、肉体感覚をはなれてはイメージの想起が出来ないという点にあると思う。

その世界の中にあつて一人々々が、どんな言葉との接触のしかたをしているかを知りたいと思う。従って子供が大人の仕方で言語化しようとする

日頃の感覚と違うため、最後まで続けることが出来ない。又途中で言えば大人(親を含む)が推察してしまう習慣から、あとはおまかせというような例も多く見られる。

この状態は子供の大切な感覚を育てることなくまた、言葉を習得していくための大切なかべを不用意にとりはらってしまう、発達を妨げることになると思われる。

これから次第に成長して抽象的に言語を用いるようになるためには、第一歩の自分の肉体感覚を充分に用いて、言葉とイメージをつなぎ、実際の行動とも一致させておくことが大切であると考えられる。

イメージと言葉と実際の行動を一致させる学習をするのになぜ他のものを選ばずにあえて「位置」を題材としたか。

一つには、喜怒哀楽、におい、色彩等は、一見イメージを想起させやすいと考える向きもあるだろうが、このように感情が複雑であるものを扱えば気持といったような他の分野の処理の方が広がってきて学習の焦点がぼやけてくるおそれがある。

もう一つには、位置のような空間の概念でさえも子供にとっては肉体的感覚の世界でとらえるしかないことがある。

その上題材がかわいた題材(気持ちなど多くのものが含まれているものを湿っているとすれば)であるので、その中でその子なりの客観性を持ってとり組むことが出来ると考える。その子なりのというところでその子の把握のしかたのくせや世界の広がりが増えてくる。又一つの場の設定をすることによってイメージの言語化と実際の行動とのつり合いもわかってくるものと考える。

②

齊藤	石井大	尾上	浦滝	あきら	村井	伊藤	石井大
竹中	門間	船山	今村	丸山	樋口	宗像	榎
山本	川西	酒井	村田	大川	時崎	あさか	おがた
中村	因泥	大川	谷	北村	こう平	野中	高橋
佐藤	梅津	ももせ	中村	芝崎	渡辺	丸田	遠藤

①

大川	中村	榎	竹中	大川	伊藤	谷	佐藤
時崎	村井	石井	遠藤	高橋	門間	渡辺	因泥
丸山	川西	丸田	梅津	山本	渡辺	中村	石井
村田	尾上	船山	野中	ももせ	樋口	佐藤	浦滝
齊藤	北村	宗像	おがた	酒井	こう平	今村	芝崎

④

中村	丸田	中村	おがた	竹中
佐藤	大川	村田	伊藤	榎
北村	船山	宗像	谷	こう平
山本	時崎	大川	浦滝	石井
川西	佐藤	芝崎	梅津	野中
因泥	高橋	石井	尾上	村井
門間	齊藤	遠藤	樋口	渡辺
百せ	酒井	今村	あさか	丸山

③

野中	石井	川西	浦滝	高橋
山本	酒井	今村	こう平	遠藤
村井	大川	芝崎	榎	船山
渡辺	中村	伊藤	佐藤	中村
尾上	宗像	おがた	大川	佐藤
石井	村田	時崎	丸山	北村
梅津	齊藤	竹中	谷	丸田
樋口	あさか	門間	ももせ	因泥

目標

今まで宝さがしの地図、ことばの地図（資料を参考にしてください。）などを学習してきたが、今回は、教室内で座席がえを行うことにより自分の座席の確認をイメージで行い、ことばに写しかえ、実際に行動するという過程で我々大人は、子供達のそれぞれのイメージとことばとのかかわりのくせを見たり又どこに子供達同志の接点があるか、実際行動とどう結びついているのかを見きわめていきたい。

又、子供達自身は、場の設定によって一つの言語とイメージのつながりに必要を感じ一つのかべを経験し、やがてそれぞれの力の範囲で解決をつける機会を持つことになろう。又いくつかの共通の感覚を持つ子供達のイメージの言語化及び行動を見聞したり、他の子供達の指摘があることから、刺激を受け無意識であったものから意識して行う方向に変化する機会ともなると考える。

指導計画

新しい座席を座席表を見て、（イメージ、ことば、行動によって）確認する。実際にすわってみる。

本時の展開（74ページ参照）

授業記録

Ti 今までのいろいろな地図を書いてきましたね、きょうは、机と椅子の地図あそびをします。これから、青やピンクの紙をわたします。それをじっと見て、自

分の名前をさがしてぼくの席は、あそこだなと思う。そして、あとでことばでいってもらいます。指をさしたりしてはいけません。(紙をくぼる①の紙) Cもうわかったな。

Ti できた?

C どういうふうに言ったらいいのかなあ。

(ここで指さしたり、教えようとしたりするものが多いので教えないように言う)

Ti 言葉の地図でいってごらん

あさか 右の上から三番目で、えーとここから二番目

Ti みんなカード持っているから、あゝあの人これだな

これを言ってるんだなってわかった?

門間君、言葉の地図でいってごらん。

門間 二の列の前から二番目の右側。

村田 四の列の四番目の左側。

(あさか、門間、村田の三名とも①の紙の二つずつ

続いている机を一つとしてかぞえ、その右側と

か左側というように言う。それは、毎日学習する

机が二人で一つに続いている机を使っていて、それを

廊下側から一列目を名称として「一の列」とい

っているからである。しかし、今日は、②、③、④

と進んでいくにしたがって、机をいろいろな方向に

動かしていく必要があるため今日の学習のためにだけ

一人用の机を借りて、二つをつけて並べているので、

三組の児童にとっては、一つの机の時と同じように

見え、同じように考えているのである。そのことを

理解していれば、門間と村田は正解といえる)

渡辺けい子 右のはじっこ前から二番目の右。左側。

(雑音でわからず、言い直し、)

右側のはじっこ、前から二番目の左側。(これも、「一の列」の名称は使っていないが、二人用の机と

一人用の机が二つくっついているところを混同しているが、その点を理解すれば位置として正解である。他の子供達の理解もここで毎日の生活を基盤としてわかったという気持ちになる。)

Ti 今、四人の人に言ってもらったね。よくわかった?

三人ともわかった? わからないのもあった? そう、

じゃ自分のわかるか? (C わかると多数の声、Ti は

毎日の生活の基盤を利用したことばの地図で①は一

応の練習になると考え行動を見ようとした) じゃこの

カードだけ持って、人に教えてもらわないで、新しい

席に移って……

Tu ちよっと待って下さい。今、四人の人が言って、そ

して四人の言ったのが、だいたいわかるって言って

たね (C そう) おじさんにさっぱりわからない (C

おどろいてガヤガヤする。なんでさあとか口に言う)

おじさん何もわからない。先生も、じゃ、みなさん

動いてって言うてるけども、おじさんにわからない

の。あそこらへんにいる人(会員の先生方のこと)

たちもわからないんじゃないかな。

Ti あ、わかんないって。先生は、わかった? みんなも

わかった?

Tu 何でわかるの君達は。おじさんわからないよ。

Ti あ、じゃそれを教えてもらおう。

(子供達は、頭の中で自分の座席の位置が思いうか

んだし、友達言うこともわかり安心して行動しよう

としたが、突然、わからない人が何人もいるという

事実を直視した。言い方がこれではだめというこ

とだけを理解した。とまどいとはとする雰囲気)

Tu その違いはね、きっと、みんなはここで毎日やって

いるわけでしょ。ところが、おじさんとか、よそ

から来ている先生たちは、今日初めてこの部屋に来

たんでしょ、さっぱりわからないよ。右だ、左だっ

ていったって、わからないなあ。右から、三番目:

おじさん右ってこっちだな? 右から三番目(あゝ反

対だの声) 全然違うんだよなあ。初めての人にもね

「あの子は、あその席へ行くんだな」っていうの

がわかるように言ってくれなくちゃ。今のは、四人

とも、もう一度最初からやってもらいたいな。

Ti わかった? 注文がついたよ。あさかちゃんもう一度

やり直して、おじさんにもわかるように、おあさ

さんたちにも。

あさか 二の列から三番目(復唱する子がいる) 二の

列の、左あ右側から三番目。

(ざわざわする。まだ「二の列」という名称から離

れられないでいるが、さっきよりは、正しく言える

ように努力している。)

Tu わかんないんだなあ。あのね、おじさん耳がわるい

から、わからないんじゃないのよ。聞こえてるんだ

けどもわからない。何でわからないんだろう。(C

言い方が悪い) 一番最初に言った言葉からわからない。

「二の列から」って言ったって知らないもんね。

Ti それじゃ誰かに、(ガタビシと音がして、立つて教

えようと指さしはじめる様子) 指さしちゃだめなの、

言葉の地図で教えるの。二の列ってそこを教えて:

Tu もう二の列って言ったなら、あさかちゃんや他の人達

も何か約束しているんだね (C うん) ところが、お

じさん達は、約束知らないもん。二の列……これが

二の列かな(笑い声違うの意) いち、に、向こうが

「二の列」かな(笑い声違うの意) 強く)

Ti それも教えてあげよう。

あさか 廊下側の二番目の一右側から三番目。

(C さっぱりわからないなど多数。)

Ti なんだか不思議なこと言うね。なにが不思議かっていうと、

野中 三番目っていったら、伊藤君と大川ゆきさんのところになっちゃうもん。

(C なに言ってるの、わからない声、しきり三番目と
いうのに机二つを一つにすることを混同していいよ
よわかりにくくした)

ヒント。廊下側のって、どこに書いてある。(C 廊下
なんて書いてねえよの声)? だからわかんないの
よ。けい子ちゃん、助けてあげて。

Tu あさかちゃんをいじめてるんじゃないよ。廊下側って
いうのがわかんないなあ。

Ti 門間君どうなる?

門間 // ① // 書いてある方から:

Tu // ① // と書いてある方が、"廊下側"ですって
んですか。なら、わかりました。やったア、じゃあ
この地図はね、この①と書いてある方が、そちらの
"廊下側"。こう持っていくんだね。それをこう持
ったり、こうやったりしたらだめなんだね(べつ
の持ち方を示して) 良くわかりました。そこまでは、
よくわかった。

門間 二の列の前から三番目の:::(ざわつく)

Ti そこまで言えたのね。廊下側の:がわかった。その
あと自信がないね。

(まだ門間君は、"二の列"という言い方を離れる
ことが出来ない。他へ転じる。)

幸志君、何か言いたい?

幸志 // 廊下側 // ①と書いてある廊下側の方から、前か
ら三番目の | 廊下側からア横に三番目。

Ti それが誰のところ。
幸志 あさかちゃん。

Ti 今度はわかった?(よくわかったの声多数) 今、あ

さかちゃんの助けてくれたんだよね石井君が、ん?
君達がわかんなくなっちゃった? 今村さんは、さっ

きのあさかちゃんの言い方はわかるけれども、今度
こっちの先生たちにわかる言い方だと、あなたには
わかんないわけだ。

ただてる どちらがうるさかかわかんねえ:::

Ti ただてる君。いってごらん。

ただてる どちらが後ろか、前か、わかんないから、

三番目とか四番目が狂っちゃう。

Ti さあどうしよう。みんな一緒に考えてよ。

大川ゆき こうやって自分の方に向けると、こっちの①
って書いてあるのが、こっちの方に向きます。

Ti 自分の顔の方にこう向けると①がこっち側になるか
らって言っています。わかるかな。はい、たかゆき君。

たかゆき 半欠けまるが、後ろの方に、こうやって向
いているから。だいたいこっちこうやって後ろ向き
に座ってるんじゃないから、だから、半欠けまるが
後ろになるように紙を回せばいい。

こうへい やっぱり。

Ti やっぱりって何?

こうへい うんとね、自分のね、名前の方持ってきた
方がね、こういう風にやってね、後ろに座ってるん
じゃないかしら、そうしたらこの半欠けまる:::その
とこが廊下にさっき言ったからね、まるのついてい
るところが後ろなわけ。

Ti あなたは大川さんとたかゆき君のと両方考えてたわ
けか。榎さんはどう思ってたの、あなたは"動きな
さい"って言ったたら、動こうとしたよ。動こうとし
たのなら、言ってごらん。

榎 ①っていう方から、三番目の、一番前の左(ざわざ

わわかんねえな。"三の列"と三番目というのが混
同している)

Ti ①どこに書いてある? 教室のどこかに①って書いて
あったのかな。

榎 書いてないけどこれ:::

Ti でないよ、これ(紙)は書いてあるけど教室は出
てないよ。そこが、わかんない? じゃあ、大川さん

やたかゆき君が言ったのと同じくへい君が言ったのは、
地図をこうやってみたときのこの地面みたいなのだ
ったね。それから半欠けまるは、なんだったって。

(C 椅子/) うん椅子。椅子のあるところ、椅子の
カーブだっていうの? 他のはないの? そう、じゃあ
ね、今度は大丈夫かな、さっきは簡単に動こうとし
たけど、よく考えて動いてよ。動いて!

Tu ちょっと待って。

C また | なんだよう、どうしてなど多数。

Tu おじさん、心配してあげてんだよ、今、席がえして
もね、ぼくはきつと行かれないなと思ってる人い
るんじゃない? そういう人は、先に手をあげてみて。
(C いないよ!) あ、そういうのはいいの! (C
(C かんたんだあ) よし、心配しすぎだった。はい、
どうぞ。

— 動く— 教えてもらいそうな子がいる。

Tu むななな君。今、おじさんが見てたら、一番おそか
ったよ (C うん) そしてみんな他の人座っちゃった
ろう? (C うん) したら、むななな君は、考えな
くてもいいんだね? 空いている所へ行きゃあいいん
だもん (C アハハ::: だめなやろうなどの声)

むななな君は、頭がいいのかもわからないよ。俺は
最後にとつこう、一つ残るはずだ (アハハハ:::)
そこへ行こう。(C 一人まちがえたらどうすんのの

声) ああいう行き方もあるんだな。おじさん感心したよ。(アハハ……)

Ti ああ、先生も聞きたいのね。今村けい子ちゃん、初め、そこに座ったんじゃないわね。初めどこ座った？(C はじめオレがいるとこすわった——)

どうやって決めたの？

けい子 自分がね、好きなどこ行けばいいのかと思ったの(Cアハハ：好きなどこ：アハハ)

Ti わかった。今度は聞いててね、好きなどこかどうかね。みんなわかったね。でも、これは易しいんだ。だんだん難しくなるかもしれない(Cエーツ)でもよく聞いているとだんだん易しくなるよ。

もう①はいいね。じゃ②をあげます。(Cえーっの声)

椅子を動かしてもらいます。後ろに動かして下さい。(青い紙②を配る)

新しい席はどこか、よく考えて、自分の席は、あそこだなど頭で考えて下さい。(青い紙に 椅子の部分が消えているので直してもらおう)

それでは、言葉の地図で言って下さい。ゆう子ちゃん、おねがいます。ゆう子ちゃんは言えないって？百瀬って書いてあるのを探すのよ。

Tu おじさん心配でしょうがないから、大丈夫か。椅子のところ、まちがえないでね。そして、みんなが座っている机と椅子は、ちょっとちがうね。その青い紙とね。その辺が心配なんだなあ、うまくやれ(C

いいよ。大丈夫だよ)よし！

Ti ゆう子ちゃんは、ちょっと考えてんだって、船山さんわかるかな。

船山 わからない。(Cわかる、かんたん。)

Ti あ、簡単／なんて言ってるよ。くやしだね。野中君

やってみて。

野中 ろう下側から四番目の左側。

Tu 廊下側の四番目の左側？ わからないなあ。

Ti 廊下側から四番目、先生が持っている地図のところにはいないよ。野中君に聞くけれど、廊下側ってどこなの？

野中 ②の方。

Ti ②の方が廊下だから(エーツ)エーツ？って言った人誰？エーツ？って言ったのは、ちがうって言うことなんですよ。はい、丸田さん。

丸田 こっち側がろう下だから、②の方じゃない左の方が廊下だから、ここには廊下はない。

Ti と丸田さんは言うの。みんな何とも言わないから、丸田さんは自分が間違っただんじやないかしらって心配してるよ。

村田(つぶやいて)いいよ。

Tu 丸田さん。だからおじさんは、言ったんですよ。こうやって見て、そして、こっち側が廊下だから、だから②の方が廊下じゃないって言ったんだね。だけど、丸田さん。そうやってみたら、みんなが座っているときに、椅子はどっち側になっているの。あなた今、椅子は机のどっち側にあるの。(Cこっちじゃないかの声)こっちじゃないかって言ってるじゃない。

Ti 何が間違っただかわかった？じゃあ、野中君もう一度言ってみて。どうして②の方が廊下といたのか。

それがみんなにわからないのよ。

野中 こっち側の方がさあ、②の方が廊下側だから。

Ti なぜ廊下側かってみんなわかんないのよ。

野中 後ろになってるから。

Ti どこが後ろになってるの。

野中 こうやってやんと、こっち側が廊下に……(図をさかさまにして見せる)

Ti ああ、名前逆さまに持ってるんだ。ふうん名前逆さまにしゃいけないうって書いてないものね。

Tu 野中君は逆さまに持ってるんだね。今、その図を逆さまに持ってた人。野中君に言われないうちから

(五・六人手を上げる。)

Ti 教えてもらったように名前を逆さまに持ってごらん。椅子がどっち側にあるかな。君達椅子のないところに座ってるの？ちがいますね。だから椅子のある方に名前を向けると、名前が逆さまになるの。

Tu で、逆さまになると、②と書いてある方が廊下側になりますって言ったんだね。野中君は。

野中 はい。

Ti では、野中君、ぼくの席、もう一回言ってみて。今度はみんなよくわかるかもしれないから。

野中 廊下側から四番目の……

C 四番目っていうのが、おかしいな。

野中 二番目の……右側(まだ〇〇の列)という言い方へのこだわりがまじり合っている。)

Ti 右側？野中君しっかり、野中君の言い方が変わったら、みんなはまたメチャクチャな所へ行っちゃるよ。

Tu やっちゃおう。

Ti では、自分の席は、わかりますか。用意／ドン／(うろうろしている子が多い。中には図を逆さまに持たない子があるので注意する。)

Tu 宗像君、今度は早く座ってたね。さっきの宗像君のまねして、最後に空いた所へ座ろうと思ってた人が三人ぐらいいたけれども、三人もいたら困っちゃうね。間違えている人いなか調べて下さい。

Ti さっき大川君こっち座ったでしょ。困ってたでしょ。

谷君。どこに座っていいか、わからなかったね。樋口さんは、空くまでずうっといたじゃない。

樋口 ほんたいの方から入った方が近いから、こっちからいって、どいてくれるの待ってたの：：

Ti あーそう。少し難かしくなってきたでしょう。でも、易しい易しいって言う人もいるのよ。では、三枚目いくよ。(黄色のカード③を配る。)

(自分の席の図を示したり、あっちといって机を指さしたりする子が多いので注意する。)

自分の席はどこか、もう言える人。手をあげて、五人も言えそうだって。

うまく言えないけれど、行ける人。(十二人手をあげる。)

Tu 言えるし、行ける人。(五・六人)全然言えない人。

(四人)言えないけど、ぼくはどこへ行くかわかる誰れだった。

Ti 門間君です。

Tu 門間君。黙っていいからね。ぼくは、どこだって歩いて行ってごらん。

ああ、あつてる。

Ti 北村さん行ってごらん。

はい、あつています。

では、言えて、そこへ行ける人。山本さん。

山本 廊下側から一列目の五番目。廊下側から二列目の五ばん目。

C どっちから。

山本 前から五番目。

Tu どっちから前なの？全部前だよ、手前から五番目の

右側。えっ？あれ？

山本 廊下側から二列目のこっちの方から。

Tu こっちの方？

山本 ロッカーの方から四番目。

Ti 中村なおみさん。

中村な 廊下側から四列目のロッカーからかぞえて四番目。

Ti 中村君は。

中村知 廊下側から四列目のロッカーの方から一列目。Ti 持ち方ができたら言えたね。中村君は。では、動いて下さい。

へ時間がかかる。紙の持ち方の違う子何人かに注意する。

Ti よくわかる人の持ち方を見てほしいのね。では④を配ります。でも、もうやめましょうか。むずかしいから。

Tu おじさん心配のあまりここでやめてもらったの。なぜかっていうと、次のは地図に椅子は書いてないんだよ。むずかしいからやめよう。

C わかるよ。

Tu では、成功するかしないか、ちょっとやって、やめよう。しっかりやんなさいよ。

Ti いけるっていう人に「ここ」っていうのだけ言ってもらおう。

地図を見て、わかった人手を上げて。紹介します。

野中君。山本さん。酒井さん。今村さん。榎さん。

芝崎君。石井幸志君。村田君。北村さん。因泥君。

では因泥君から、因泥君は「ここ」だと思います。

Tu 因泥君。そこでもいいのか？おじさんは、そこじゃないと思ってた。因泥君そこでいいんだね。

Ti みんないいの？(いいの声 多数)

Tu でも、おじさんは、そこじゃないと思ってたんだよ

(ぼくもーの声)

Ti 因泥君。ここに立っただけでもらえますか？次、北村

さん。よく見えてね。地図の持ち方もよく見えてね。(因泥君と地図の持ち方が逆である。)

Tu あー北村さん、そこ行つたのね。おじさんね。そこへ行くかなあと思つてただけでそこへ行つちゃつたなあ。そうすると、ちょっと見てごらん。その地図。因泥君手を上げて。北村さん手を上げて、(笑い声)あれ、地図で見ると近いのね。ほらア(はなれていることを示す。北村困つた顔になりちがってたという身ぶりを示す。)

Tu いや北村さん違つてないよ(どっちがちがうんだの声) 因泥君も違つてないんだよ。でもどうしてだろう。離れちゃつた。だから難かしいって言つたじゃない。

Ti いやア北村さんがあつてれば、因泥君は違うんだね(その声)それで、こっちがあつてれば、あつちは間違いだね。さあどうしよう。(因泥があつてるんだの声)

Tu ちょっと聞いてみよう。因泥君があつていると思う人(多数) 北村さんがあつていると思う人(多数) 北村さんも因泥君もあつているという人。(三名)

Ti 三人いた。

Tu ちょっと三人の人、立って。ちょっとこの名譽ある顔を見せてよ。北村さんも因泥君もあつていないんだよ。(エー。あつてない。地図が反対にするだけ。あつてない間違つてるの声々々)

Tu でも二人ともあつていなのに、こんなに離れてしまったのはなぜだろうね。なぜだかちゃんと説明できませんか。(がんばつて、野中の声) それ、今度考えて下さい。

〈Tu 上原教授〉

〈Ti 市山仁美(横浜・大正小・教諭)〉

学習の活動	指導上の留意点
<ul style="list-style-type: none"> ○ 本時のねらいを確認する。 ・ 座席表を見て自分の席を自分の力で確認する。 ・ 頭の中で(イメージ) ことばしよがわかったら、みんなにわかるように(ことばの地図のときのよう)に話す。 ○ その席にうつる。 ○ ①のカードをくぼる。 ・ 自らの力で確認する。 ・ 四人の発言をきく。 ・ その席にうつる。(全員) ○ ②のカードをくぼる(机・いす後ろむきに移動) 各自確認する。 ・ 発言者四人。 ・ 席にうつる。(全員) ○ ③のカードをくぼる。 ・ 各自確認する。 ・ 四人の発言。 ・ 席にうつる。(全員) ○ ④(机いすの移動してから)のカードをくぼる。 ・ 各自確認する。 ・ (わかりやすく) 発言者四人。 ・ 席をうつる。(全員) <p>今日の学習のまとめ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 机といすの地図を見て学習する。 ○ 自分の力でわかるようにするため、おしえたりしない。(おそわたりしない。) ○ すぐ指名もされないのに発言する子には注意をする。 ○ まちがえても笑ったりしない。 ○ 長方形の囲みが前後に長い教室のわくを示す。 ○ いすの位置と名前の向きも前を確認できるので前からとか右左などが用いやすいし、場所の確認も早いはず。 ○ イメージと行動の一致を見る。 ○ ①に対して前後が逆になっている。なにを目的にするか(前後をきめる基準) 発言の途中で混乱しないかどこから間違がはじまるか。 ○ 運動場向きに名前のかいてあることに気づくか。 ○ 椅子のむきと名前の向きがちがうための位置のちがい(椅子に早くから気づいているものにはやさしい。) ○ あらかじめ向きがかわっている方向で考える。 ○ イメージを言語化するときどこを基準にしていうかをみたい。 ○ イメージとことばと動きの一致が出来たかをきいてまとめる。

編集後記

☆本会も一人二役とはとてもいえないことを思い知らされた。昨年は欠号の言い訳をするのではないが、本会発足時より会員のこのつこつと集めてくれた子どものことばのスナップを『はなちがナンでえ』と題して小冊子にまとめて刊行した。このため本誌刊行が足踏み。特に、子ども喧嘩の特集して

ただけに、切歯扼腕。決してあちらを先、こちらを後にしたつもりはないのに、所詮は、本会の地力相応の結果が出てしまったのである。

☆火事と喧嘩は江戸の花というが、子ども喧嘩は正しく児童の言語生態を示す花であった。喧嘩に粹がってみるのは江戸っ子だけではなかった。行為を意識が蔽い、見られている行為として行為を整えるから、心にもないことばが口から飛んで出る。感情制御を内からでなく、外から見栄えよく型押しするようなのだから、言ってみれば、演出家を持たぬ実にくさいひとり芝居しているのに似ている。

☆御本人たちにしても、うすうす直感しているから、つっぽるとかぶりっ子などいふのであろう。当世の大人たち、民俗学の方で使う通過儀礼などい

う便利な用語があるのだから、もう少し拡大解釈して、この子どもたちの通俗ぶりに折り目と袂を見つけてやる知恵と努力が戦後欠けていたとも思う。七五三から成人式まででは、間が抜けすぎている。

☆近代の教育は習性、あるいは通俗性に対して離反して一向平気なものだ。むしろそうすることが近代的であるような錯覚があることを自戒すべきである。その点、佐藤憲朗君が遠野の子どもたちに兄弟姉妹のそのいづれかであるかによって喧嘩に対する意識の違いを見ようとしたことは頂門の一針と言って憚らぬ。生れながらにして人間は、それぞれにおいて身分を持っている。人間存在が身分関係であるのに、戦後とともに、身分を差別語として放棄し、それでいて人間存在だけを強調した。☆古めかしいといわれようとも、本立ちて道生ずで、生態系を人間だからより強固に、より整え、より確かなものにするところを文化とも哲学とも愛とも呼んで来たのであった。人間としての愛の絆をもう一度互に引き直そうではないか。そうしてそれだけが頼りなのだということを心に問い直しながら——子どもの喧嘩の調査結果を見ながら、どうしてもそんな気にさせられたのである。(T)

昭和五十七年十一月二十三日印刷／昭和五十七年十二月一日発行／児童の言語生態研究第十一号／一〇〇〇円／発行所・児童の言語生態研究会／東京都町田市玉川学園六ノ一ノ一／玉川大学教育学科研究室気付／振替東京五九一〇五

印刷・西銀タイプ社